

ヒュームの信念の理論について

石川 徹

ヒュームの哲学を全体としてどう評価するかという問いに対しては、様々な答えがあり得よう。しかし、彼が人間の知性の働きの基礎を理性ではなく想像力に置いたことは、「知性即ち想像力の一般的でより確立された特性」(267)⁽¹⁾と言うヒューム自身の言葉を引くまでもなく明らかである。そして、このように理性から想像力へと知性の働きの担い手を移した事は、知性の産物である人間の知識の典型を絶対的現実性を持つ知識 (knowledge) ではなく、可謬的な信念 (belief) に求めた事を同時に意味している。そこで本論文では、ヒュームの哲学においてこの知識から信念へという変化が意味するものを、信念の理論の検討を通じて明らかにし、彼の哲学の全体を捉えるための一つの手掛かりとしたい。

1 予備的考察

先ずヒューム自身のこの問題に関する論述を検討する前に、信念と知識に関して簡単に一般的な考察を行っておく。勿論この主題自体が大変に複雑且つ困難な問題を含んでいるが、ここでは後の論旨に必要と思われる事柄に限っておく。

第一に一般的に知識とか信念とかが問題にされる場合、大きく分けて二つの方向があるように思われる。一つはその内容（普通は命題の形で表現される）の真理性の問題で、知識の正当化や基礎付けとかの問題もこちらに属する。もう一つはその内容とそれを抱く精神との関係を問題にしていく方向で、知識や信念を精神の働き或いはその結果と見てその本性を検討していくものである。勿論この二つの問題群は全く独立なものではなく、むしろ同じ問題に対する異なった接近法と言うべきであろうが、ここでは便宜的にこの区別を置いておく。

さて、我々は通常「知っている」という事と「信じている」という事を区別してい

る。しかし、これはそれを抱いている精神が、両者をどんな場合にでも異なるものとして判別できるという事を意味するものではない。とすれば、この両者の抱かれ方、つまり精神との関係は非常によく似ているか、或いはこの点では両者は区別できず別の区別の基準が必要なように思われる。つまり、上記の二種の接近法の内の後者の方法ではうまくいかないように思われる²⁾。

では、どのような場合に、両者の区別が際立って現われるだろうか。それは、間違った事を正しいものと思い抱いていた場合である。例えば、コペルニクス以前天動説が常識であったが、現代の我々は、当時の人々が太陽が地球のまわりを廻っていると「知っていた」とは決して言わず、「信じていた」と言う。つまり或る事をいかに堅固に正しいものと考えていても、それが客観的に誤りである場合には、知識とは呼ばないのである。ここから次のような考えがでてくるように思われる。我々が何かを本当に知っていると言えるためには、それが誤りの可能性を含むものであってはならない。何故なら、もし万一誤っていれば、それを知っているとは言えなくなるからである。従って知識は誤りの可能性を含まないもの、必然的に真なるものでなければならない。古代ギリシャのエピステーメーとドクサの区別やデカルトの方法的懐疑、またヒュームの絶対的知識 (knowledge) と蓋然的知識 (probability) の区分もこの考えの影響下にあるといえるだろう。

しかし、誤りの可能性を含むもの全てを知識の名に値しないとして退けるとすると、我々が知っていると考えているものの多くは捨て去らねばならなくなり、常識的な考えとは非常に異なったものとなる。確かに我々は明らかに間違っている事を知識とは呼ばないが、一方たとえ論理的には誤りの可能性がある、つまり必然的真理ではない事も、それを誤りとする積極的な理由がなく且つ十分に信頼に足るものであれば、それを知っていると言う事に問題があるとは考えない。例えば、目の前の火のついている煙草に触ると熱いという事を、その煙草から煙が出ておらず、作り物かもしれないとでも考えない限りは、当然知っていると言うであろう。

以上の事から、我々は「知っている」という言葉の使用の基準を少なくとも二種類持っているといえよう。この両者は直ちに両立不可能なものではないが、どちらを基礎にするかで知識に対する考えは随分異なってくる。上に述べたように、絶対確実なもののみを知識と認めるとすれば、数学・論理学を模範としそれに類する学のみを認める立場がでてくる。また経験論をとるにしろセンス・データに関わるもののみを確

実とし、他はそこからの論理的構成であるとする立場がある。合理的な疑いのない場合は知識と認める立場では、どういう場合に思い抱いている事柄を知識と認めるか、どんな基準をとり、それをどう正当化するかという事が中心問題となるように思われる。

さて、ヒュームの考えはどうだったであろうか。どうも、両方の考えを共に見出せるように思われる。彼が事実的知識について懐疑的な主張をしている時は、前者を念頭に置いていると思われるし、因果判定の規則を提出して自らの探究の理論とする際^③には、後者であるように思われる。この問題については、後に触れることとして、以上の考察を念頭に置きヒュームの論述を検討する。

2 ヒュームの理論

ヒュームが信念の問題を主題として明示的に取り上げるのは、『人生論』第一巻第三部第七節から十節に至るまでの因果推論の結論としての信念の検討及び Appendix での修正だが^④、その他、外的対象の問題や、人格の同一性の問題においても我々がいかにしてそのような事柄を信じるようになるかが中心問題とされ、信念がヒュームの理論のなかできわめて重要な位置を占めていることは明らかである。このように様々な問題に関係して現われる信念すべてに對し同一の取り扱いが可能かは問題だが、先ずヒュームがはっきりと主題としている因果的信念に関する箇所の論述をまとめ、考察してみよう。ヒュームは彼の因果的探究の手續きに則り、信念をその本性、原因、結果にわけて考察しているのでこの分節にしたがって検討していく。

(a) **信念の本性** ヒュームによれば信念はその対象の観念を本質的部分として含むが、そのみではない。或る事を思い且つ信じない事は十分に可能だからである。しかしまた、信念は何か新しい観念を対象の観念に付け加えるものでもない。対象の存在を信じていようがまいが、思い抱いている内容それ自体は変わらないからである。従って観念を単に思い抱く事とそれを信じる事の違ひは、それを思い抱く仕方にある。そして、或る対象を信じるとは、それが現実に存在すると信じる事だが、我々が何かの存在を確信する最も典型的な場合はその対象の印象を我々が知覚している場合であり、従って信念もこれと類比的に考えられる。つまり、単なる観念と印象の区別をヒュームはそれ等が持つ力と生氣 (force and vivacity) の違いにのみ求め、信念

も単なる観念とは、この点、つまり力と生気をより多く持つという点で異なるとする。さらに、この印象と観念の違いは感じる事 (feeling) と考える事 (thinking) の違いでもあり、そして単に考えられるという事からは本当にあるという事を導く事は出来ない、即ち、力と生気とを恣意的に産みだす事は出来ないので、これらは信じられている対象の観念と関係（この場合は因果関係）を持つ現前する印象から得られねばならない。従ってヒュームによれば、信念とは「現前する印象と関係即ち連合する生き生きとした観念」(97) と定義される。

しかし、この定義は後に Appendix で修正を加えられる。それによれば、信念とは単なる思い抱きとは異なる特殊な感じ (feeling) に他ならない、或いは観念が抱かれる仕方 (manner) ともいわれる。しかしまた、ヒュームによれば、いかなる言葉を使ったにせよこの心の作用の完全な理解を与える事は出来ず、誰もが日常生活のなかで十分に理解している信念という、その本来の名前で呼ぶほかはないものである(629)。この部分の修正は力と生気という量的な概念によって心の働きを捉えようというヒュームの試み⁵⁾の破綻を示すともいえるが、しかしこれにより力と生気という表現を全面的に撤退させたわけではなく、むしろ、この表現によって表そうとしたものが単なる程度の違いでなく心の作用の違いであった事をはっきりと示したものと考えるべきだと思われる。

しかし、それにしても、生気の程度の違いという表現は一次元的な尺度での相違を思わせ、ストラウドの言うように⁶⁾、仮に信じる事を現前する印象を持つことと、単に観念を思い抱く事の間に置く事が可能であったとしても、否定する事、信じない事、疑う事等その他数限りなくある同一の観念に対して取り得る異なった心的態度をこの物差しの何処に置けばよいのかは、全く回答不可能な問いのように思われる。こうした困難が生じてくるのも、ヒュームがまず最初に、印象と観念の違いを力と生気の程度の違いによって説明した事が原因だが、しかし、先にも述べたようにこの区別を導入した彼の意図は、考えることと感じることの区別を何らかの客観的基準に求める事であったと思われる。とすれば、彼はこの区別のほうを、生気の違いという基準よりも基礎的なものとみなしているものであり、心の作用の違いというものが、それがどのような仕方でも説明し得るか別として、明らかに区別されるものであるということをもまず認めることから出発しており、上記の解釈を採用することに障害はないように思われる。ただ、観念の生気と言う時、それが伝達されるという表現が極めて頻繁にでて

きて (98f), この点にヒュームが生氣という表現に執着する第二の理由があるが、これは後に検討する。

(b) **信念の影響力について** これまでみたように、信念の本性を心の持つ独特の感じとしてしか語れないならば、その原因や結果に言及することなく他の精神の作用との違いを有意味に語れないであろう。また精神の作用として信念を考えた場合、それがいかなるものを生み出すかに言及しなければ、その本性を説明したとは言えないであろう。ヒューム自身も、信念とは「判断の観念を想像力による虚構の空想から区別する、心によって感じられる何かである。信念は判断の観念に対しより多くの力と影響力を与え、より重要なものとして現れるようにし、心に定着させ、我々の行動全ての支配原理とするのである。」(629)と言い、結果への言及を主とした説明を上記の定義とは別に行っている。

さて、「信念の影響」という節でヒュームは、先ず、上に述べたことを確認したのちに判断のみならず、情念、空想にも信念は強力な影響を与えていると述べ、「空想によって産みだされた生氣は習慣と経験から生じる生氣より大きいことがよくある」(123)と言う。一方 Appendix において、詩や狂気により生じた生氣は「その調子がいかに大なるものになろうと、我々が推理した時（例えもっとも程度の低い蓋然的知識に基づいてにせよ）心に生ずるのと同じ感じがする事は決してない」(630)と言い切っている。例えば、映画や小説に感動した時、いくら物語に感動したにせよ、通常は実際現実に起こった場合とでは、それに対する反応は異なる。この違いがどういう理由によるのかはおいておくとして、この違いが、つまり人間の採る行動が、その人間の思い抱いている内容が実在についての信念であるか否かを区別する最も決定的なメルクマールであることは明らかであると思われるし、またヒュームも明らかにこのことを認めていたと思われる。とすれば、ここでの感じという言葉は、このような違いを生じさせる精神の働きの違いをその当人に教えるメルクマールであり、生氣という言葉は当初の使用法とは異なり、精神作用各々の中での強度を示す言葉として使われているということになるだろう。この場合生氣という言葉は様々な質の違う物差し上での強度に対して質の違いを顧慮せず一律に適用されており、本来一元的に比較されるべきものではないことになり、誤解をまねく仕方では使われているといえよう。しかし、ヒュームの観念の説は、観念を相互に論理的に独立でしかも徹底した個別者として捉えており⁷⁾、その結果むしろ観念それ自体は機能的な性格を失い、想像力の働き

が前面に出てくる事を考えれば、彼の問題はその想像力の多様な働きを貧弱な語彙で述べようとしたところにあるということになるだろう。

(c) 信念の原因 さて、ヒュームは信念を現前印象と関係する生き生きとした観念と規定した上で、どのような原理によりこれが得られ、何が、観念に生气を与えるかを問うているが、その答えは探究するまでもなく信念の定義から明らかであるように思われる。つまり現前印象が、自らの持つ生气を関係のある観念へと伝えるのである。上記の信念の定義に、ヒュームが人間本性の学の一般原理とする、「何らかの印象が我々に現前する際には、印象はそれが関係する観念^⑧に精神を運ぶのみならず、同様にそれら観念に自らの力と生气の一部を伝えるのである」(98)という原理を加えれば、この結論が直ちに帰結する。そうすると、この信念の原因という問いに対する答えは、既に信念の定義の内に含まれている事になるが、これは奇妙な印象を与える。既に見たように、信念の持つ生き生きとした感じとは、その精神にもたらす影響によってよりよく理解されるものである。従って信念をも十全に定義しようとするならば、こちらを定義の中に含めるのが正当ではないか。事実、先に見たようにヒュームの信念についての説明では、この信念の影響力という点が極めて重要な位置を占めている。これをどう解釈するべきであろうか。ここで、問題はヒュームの理論の射程に及んでくるように思われる。最初に述べたように、我々が知識というものを考える際には少なくとも二つの基準があるように思われる。そして、我々の日常考える知識とは不可謬という強い基準に合致するものばかりではなく、疑う積極的な理由がなくしかも十分に機能しているものも知識の極めて重要な部分として認められる。この種の知識の重要性を認めその本性を明らかにし、しかもそれを自らの探究の論理として役立てるのがヒュームの目的であった。信念について論究しているこの部分もその探究の一部である。では、この事がいかにヒュームの信念の定義に関係するのだろうか。

我々が何かを信じているか否かというための基準はなにか。その原因が判定の基準であろうか。先に述べたように我々がどのような行動を採るかが、ある事を信じているか否かの判定基準であるように思われる。或いはヒューム流には単に信念として感じられるか、生き生きとしているか、と言った方がよいかもしれない。その際信念の内容は真である必要はない。むしろ、我々が信じていると言う言葉を好んで使うのは、その内容が偽である場合や、真というための客観的根拠をはっきりとは持たない

場合である。またヒュームにおいても敢えて信念と言う語を使うのは、我々の思考や感情の上である観念が影響力を持つということを示す事に加えて、それが不可謬な絶対的知識ではないという事を示すためでもある。しかし、繰り返しになるが、単に信念が我々に対して影響力を持っている事と、その内容が真というための基礎を欠いていると言うためだけならば、信念の定義にヒュームの言うような形で原因を持ち込む事は必要がないし、むしろ逆に原因をこのように限定してしまう事は、通常信念と呼ばれるものを排除してしまう可能性がある。ヒューム自身、偏見や教育による信念について語っているが、これらがヒュームの定義にそのまま当てはまるとは思われない。つまり、ヒュームが信念を原因を含めて定義しようとする時、彼の頭にあったのは信念一般ではなく、本来の正当な因果的信念（蓋然的知識）であったろうと思われる。しかし、先に述べたようにヒュームの議論はあくまで信念一般の解明に向かっていくように思われる。だからといって、ヒュームには信念一般の定義を打ち立ててその系として因果的信念を考えるとといった構想もなかったように思われる。このようにヒュームの信念に関わる論述、とりわけ原因に関する論述は曖昧な点が多いが、以上をまとめてみると次のようになると思われる。

まず、ヒュームが因果推理の結論を信念として捉えることには絶対的知識と蓋然的知識との区別が意識されているが、ここには先に述べた知識の要件を不可謬性とみなす考えが働いている。次に、信念は人間の知性の働きの中で極めて重要な働きを持ち、行動の指導原理であるが、ただその点のみを基準に採るとすれば、因果的に確立されている信念も個人の偏見に基づく信念も区別し得ない。もし、両者を区別しようとするなら信念の及ぼす影響やそれ自体の与える感じではなくそれがいかにして得られたものであるか、つまり信念の原因を問題にしなければならなくなる。つまり、ヒュームが信念を現前する印象と関係する生き生きとした観念と定義した時彼は単に信念の定義を試みたというのではなく、それがどんな信念なのかを問う余地を印象との関係という所に残しておき、そしてここに信念の間に信ずるに足るものと矯正すべきものとの区分の根拠をおけるようにしておいたのである。

ここで生気の伝達という表現について触れておくが、信念の特徴の本質をなす生気が印象から伝えられると述べられているのは信念一般に当てはまる事実の記述とは考えにくい。何故ならヒュームも認めるように現実（つまり現前する印象）とは相容れないような信念を持つ事も何ら不思議ではないからである。であるとすれば、彼が生

気の源泉を現前する印象に限定しなければならなかった理由は何だろうか。それはヒュームが實在（reality）と呼ぶものに関係すると思われる。生氣という言葉は知覚の精神に対する現われ方が生き生きとしている様を連想させるが、印象と観念との区別に言及した際にヒュームが示そうとしたのはそうした知覚に内属する性質なのではなく、むしろそれらを抱く際の精神の在り方であった。これが考える事と感じる事の区別であるが、この区別は前者の対象を精神に依存するもの、後者の対象を精神から独立なものと思わせる。それ故ヒュームは後者を構成する諸知覚、即ち記憶の観念と現前する印象に實在の名を与えている。さらにヒュームはこの實在の知覚と因果関係を持つ諸知覚を判断の対象として實在の体系に組入れる。そして、後者が實在という名で呼ばれ得るのはそれが生き生きとしているからではなく現前印象と因果関係を持っているからである。例え生き生きとした観念であるにせよ現前する印象と関係を持たなかったならば、ヒュームはこれは實在であるとは認めないであろう。従って、信念の定義にその原因を組入れねばならなかったように、信念の特徴である生氣は関係する印象から由来しているというのではなく、由来するものでなければならないのである。そうでなければ實在の体系の中には入れられないのである。つまり、ここでも生氣の原因の説明は単に事実の記述に留まらないで、ヒュームの哲学において必要となる或る種の規範をあらかじめ含むような形に作られているのである。先に生氣が伝わるという表現の持つ別の意味と述べたが、それはこの事、つまり生氣はどこから来てもよいのではなく、現前印象から発するのでなければならないということである。勿論我々はこの生氣という表現をあまり文字通りにとるべきではないであろう⁹⁹。しかし、生氣が伝わるという表現でヒュームが伝えたかった事の真の意味は、我々の判断が正しいものとして受け入れられるためには、現前する印象がその時原因となっていなければならないという事、つまり、印象と観念が因果的に結びついていなければならないことであったのは明らかであるように思われる。そして、この解釈が正しいとすれば、この信念の原因や生氣についてのヒュームの説は、単に人間の知性の働きの客観的記述というのではなく、むしろ彼の経験主義的或いは実証主義的立場を通常よく指摘される印象と観念の対応の原理¹⁰⁰に優るとも劣らず色濃くあらわにしている原理のように思われる。

3 信念の理論の占める位置について

最初に問題として掲げておいたヒュームの哲学全体における信念の理論の位置を検討しよう。すでに見たように、事実に知識を絶対的知識と区別して考える際に、前者を信念として捉えることが、それを可謬的な蓋然知として考える事と結び付けられているが、一方で信念を生き生きとした観念というように、あくまで精神内の事象として捉える事で、ヒュームの人間学の枠組みの中で扱えるものつまり一個の経験的事実とした。というのは、人間学は人間に関する経験的探究を行うものであるから、その探究の結果得られるのは事実に知識即ち因果的知識でなければならない。従って、知識も人間の精神の働きの中で因果的に解明されなければならないが、その知識を信念とする事で精神の因果的な働きの網目の中に完全に入れることが可能になるからである。つまり、‘I know that P’がPを含意するのに対し‘I believe that P’はPの真偽とは論理上独立だから、知識を信念として扱おうとする時その内容の真偽には取りあえず言及する必要はなく、因果的關係のみでは考えにくい真偽の問題と切り離して取り扱えるのである⁴。これはヒュームの探究が全て因果的という形を取るためにはぜひとも必要な条件であった。つまり、彼が人間の知性の働きを因果的に解明しようとする事と彼が知識を先ず信念と捉えようとする事の間には必然的な結び付きがあるように思われる。

ところで、ヒュームの因果的信念、言い換えれば事実に関する蓋然的知識の理論はそれ自体としては人間の知性の働きの因果的解明となっているが、一方でその成果は単なる記述ではなく、ヒュームの探究の論理ともなっている。これはヒューム自身の言葉からも、また実際の探究における論理的手続きからも、またこれまでの考察からも明らかである。この二重の役割をヒュームの信念の理論はいかにして担い得るであろうか。ここで一つの見通しを立ててこの小論のまとめにかえたいと思う。

因果的信念が学を構成するとすれば、それを構成する信念はただ単に信じられているというそれを抱く精神との関係のみで規定されるわけにはいかない。信念を確定するにあたり、その方法が問題となる。というのは、ヒュームによれば事実に関する知識は本来可謬的だから、どれほど確実に見える信念でもただ確実であると思われただけでは学の内に取り入れるには不十分である。従って、何らかの別の基準が必要であ

り、それが信念それ自体の性質ではないとすれば、信念と別のものとの関係を考えなければならない。考えられる候補としては、一つは学を構成する他の信念との関係であり、論理的整合性その他の基準が考えられる。実際これは重要な要素でありヒュームにおいても一般規則の問題等があるが、ここでは詳しく触れない。さらに事実それ自体との付き合い合わせということも考えられよう。しかし、これのみを信念の採用の基準とすることには、問題がある。というのは信念は直接与えられる経験を越えたものについて何事かを我々に示唆するから意味があるのであって、事実と付き合い合わせたもののみを信じるというのでは、せいぜい記憶のみを認めるという事になってしまうし、また一般性を主張する信念についてはいつまでも検証は終らないことになる。だとすれば、残るのはその信念がどのように得られたかという事情であり、学においてはその探究の方法という事になるであろう。ヒュームにおいては事実の探究は因果的探究に他ならぬから、信念が得られた原因が正当なものかどうかの問題になるであろう。信念の定義にその原因が含まれているのもこの意味で理解できる。信念の理論が二重の役割を担うために何故これまで検討してきたような形を取っているかはこれで明らかであろう。

では、この二重の役割を可能にする支えは何であろうか。その支えが何らかの論理的基礎付けを意味しなければならないのであれば、それはないということになる。ヒュームが因果推論を論証不可能と論じ(80,81)、すべての蓋然的推理は一種の感覚に他ならない(103)と述べる時はこのことを指していると解釈できる。ではその支えが何かと言えば、ヒュームに従えば当然人間本性という事になるが、もちろんただ Nature というだけでは何も意味し得ない。ヒュームは例えば教育に対してそれが自然な原因ではない事を理由に否定的(117)であるし、想像力の働きについても自然で普遍的なものと単なる空想とを区別する。この区別を可能にする「自然」とは何だろうか。ヒュームはこれについては多くを語らず、その働きについて、普遍的で抵抗しがたいものとするのみである。要するに我々の精神の最も基本的な在り方、それ以上は遡れないものを指していると考えられる。こう述べると何か神秘的なものに見えるが、ヒュームにとっては我々のありふれた日常を成り立たしめているものであり、そしてそれを注意深く検討していく時突き当たらざるを得ず、しかも、それを疑うことも論証することも共に無意味であるようなものである。しかし、この「自然」により定められているものはただ我々の日常的な知識の枠組みのその最も基本的な大枠のみ

であり、哲学はこのような我々の知識の在り方を見定めることで探究のプログラムを進めて行くのである。何故なら、哲学とは我々の常識に対する反省に他ならないのであるから。そして信念の理論もまさにこの構造をとるものでありしかも最も典型的なもののように思われる。つまり、信念すなわち知識の基本的なあり方を成り立たしめているのはそれをそのまま承認するほかはない人間の本性であるが、しかし一方その在り方を仔細に検討していくことで知識の体系をより洗練され整ったものにしていくための方法論を確立できるのである。今までみた信念の理論の性格もすべてこのヒュームの人間本性のとらえ方に発する。そして、ヒュームの人間本性の学はまさにこの自然の働きをもとにする探究のプログラムなのである¹⁰⁾。

註

この論文は日本イギリス哲学会第12回関西研究例会(1987年12月5日於京大会館)において同題にて発表したものに若干の修正を加えたものである。

- (1) 括弧内の数字は、David Hume, *A Treatise of Human Nature*, ed. by Selby Bigge & P. H. Nidditch, Oxford University Press 1978の頁数を示す。
- (2) 知っていることと信じることの間を区別すること、つまり自分が知っているということをどんな場合にも知ることが可能であると言う考えもある。 *Knowledge and Belief*, ed. by A. P. Griffiths Oxford University Press 1967所載の J. Cook Wilson, H. H. Price 等の論文を参照のこと。
- (3) 『人性論』第一卷第三部第十五節。
- (4) ヒュームのもう一つの哲学的名著である *An Inquiry concerning Human Understanding* の論述も基本的には同じである。cf. 同書第五節。
- (5) ヒュームのこの試みの背後には「人間に関する主題について実験的方法を導入する試み」という人性論の副題の意味を考慮に入れる必要があるが、生氣について各自の経験に訴える以外計量の方法を提示し得なかったのであるから、事実上この試みは有意義な帰結を持ち得ないものと言わざるをえない。
- (6) Barry Stroud, *Hume*, Routledge & Kegan Paul 1977 p. 76.
- (7) これは彼の哲学の根本原理である分離の原理(18)からの帰結である。
- (8) ここでの関係はいわゆる 自然的関係つまり、観念連合を引き起こす関係である。
- (9) ヒュームの生氣の伝達という表現には時折見られる生理学的知見〔特に動物生氣 (animal spirits) についての〕の影響が強いと思われる。
- (10) この原理(4)は論理実証主義における検証原理に比されることがよくあるが、ヒュームの実際の適用法を考えた時還元主義的に解すべきかは疑問が残る。

- (1) 最初に述べた二つの接近法について想起されたい。
- (2) これが筆者の基本的立場であるが、これを明らかにするためには単に因果的信念ばかりでなく、ヒュームが自然的つまり懐疑が無効であるとする諸信念、我々の日常的世界理解の根本を形成している信念の関係を解明する必要があるが、これについてはごく大雑把な見通しであるが論じたことがある。「ヒュームの懐疑論—Treatise, Book I における」『関西哲学会紀要』第19冊 (1985)。

〔京都産業大学非常勤講師〕

Hume's Theory of Belief

Toru ISHIKAWA

Hume thinks the exemplar of human knowledge is not absolutely certain 'knowledge' but our ordinary beliefs which are fallible. The chief objective of this paper is to investigate what this shift of emphasis means in his theory of knowledge, and try to understand his theory of belief in connection with his philosophical scheme, that is, 'the Science of Man'.

As a preliminary, the author shows there are two criterions for the use of the word 'know', and each of them is closely connected with a theory of knowledge.

The author then examines the theory of belief in *A Treatise of Human Nature*. Hume's explanation on this subject is divided into three parts; the nature of belief, its cause and its influence. According to his theory, the nature of belief is something that makes belief similar to impression, which he calls 'force and vivacity' or 'feeling'. And this vivacity comes from the impression related to the belief, and makes it the governing principle of our conduct. Therefore Hume defines belief as 'a lively idea related to or associated with a present impression.'

But the definition seems to have something strange in it, because it consists of the nature and cause of belief, but Hume explains belief mainly by mentioning its effects. The author interprets this seeming-strangeness in the definition as the result of Hume's intention to demarcate beliefs for the purpose of constructing 'the Science of Man'. His theory of belief is built to include some normative element which is necessary for the science.

Finally, Hume's theory of belief seems to play two important roles: as an explication of human nature and as a basis of the logic of inquiry. It is human nature that makes it possible. But Nature determines only the general framework of our knowledge. Philosophy can and should refine our common sense. Hume's 'Science of Man' is best understood as a program of inquiry along this line.